

あしやどうまんおおうちかがみ  
「芦屋道満大内鑑」についての一考察

— 葛の葉狐を中心に —

上田 ひろ子

目次

序

第一章 保名をめぐる女達

第一節 榊の前

第二節 葛の葉姫（人としての葛の葉）

第三節 葛の葉狐

第二章 狐について

第一節 伝承のなかの善狐悪狐

第二節 晴明の母としての狐

第三章 母と子へ晴明からみた葛の葉

結び

序

源氏物語の昔から、いや、万葉、果ては記紀歌謡の昔から古来の人々の生活は占いによって左右されてきた。物忌

み、方違え、吉凶日。格式を重んじる上流社会になればなる程物事の吉凶は重要になる。人々は期待と信頼を胸に、吉凶を占うのである。ほんの些細な出来事も、政治を揺るがす大事も人々にとって占いの対象となり得るのである。ことにごく近代に至るまで、光は太陽の昇る間しか手に入るることのできぬものであった。夜の帳がおりると、もう外は未知の暗闇なのである。未知の世界が一日の半分をしめる時代に占いは時に心の抛り所となったのではないだろうか。

そういった思いを胸に民間呪術をたどっていくと、陰陽道に行き着いた。七〇一年天武天皇の陰陽寮開設が、陰陽道全盛の先駆けとなる。政争にも陰陽道が利用され、いささか物騒な世の中に表れてくるのが、平安中期の希代の陰陽師、土御門の祖、安倍清明なのである。ここで陰陽道について深く言及することは避けたいが、最も古く文献の伝えるところは「日本書紀」に記載してある。陰陽道は牛頭

天皇信仰に基づき、学問技術中心から著しく宗教的雰囲気  
を伴ったものとして日本人に受け取られたという。そうした  
陰陽道が深く日本人に浸透していくのに、そう時間はか  
からなかったことと思う。

こうした陰陽道をベースに希代の陰陽道師安倍清明はさ  
まざまな文献に見え隠れしていく。俗信、伝説が彼を語り、  
「大鏡」「今昔物語」「宇治拾遺物語」等に彼の陰陽師ぶ  
りが登場してくるのである。さらにその後、結合し融合し、  
また削除され消失していくうちに彼の説話はひとつの説教  
節として完成され、ついに「芦屋道満大内鑑」として世の  
人々の目に触れることになる。

ところで、「芦屋道満大内鑑」成立までに定説として語  
られてきた重要な設定がある。それは清明の母が狐であっ  
たということである。ただの曆書にすぎなかった「簗篋抄」  
の一エピソード、それも安倍の清明の名に肖ろうとしたに  
すぎなかった由来譚の一文である処に次のようなものがあ  
る。

彼ノ清明ガ母ハ化来ノ人也。遊女往来ノ者ト成リ往行  
シ給フヲ、猫島ニテ或ル人ニ被留、三年滞留有ル間ニ  
今ノ清明誕生有リ(略)

正保四年(1647)刊「簗篋抄」より

ここではまだ母が狐とは明言はされていないものの、清  
明の出生の不思議さは充分垣間見ることができよう。

安家の一子相伝であった「簗篋抄」が世に流布して後よ  
り葛の葉狐の説話は少しずつ重要な位置を占めていくので  
ある。特にこの「芦屋道満大内鑑」が世にでてからは、第  
四にあたる狐別れ、もしくは葛の葉子別れの段の上演は数  
多く、「芦屋道満大内鑑」におけるメインであるといつて  
も過言ではないほどである。

この話が成立するまでに融合された伝説、説話は数多く、  
これらは全て「あべのせいめい」の名のもとに語られこれ  
らを統合すると彼は二百余年間生き続けたことになってし  
まう。これらのことは、「あべのせいめい」の名を安倍清明  
と安倍清明に使い分けることでもかなり説明はついている。  
そこまで人の心を掴んで離さぬ清明伝承の魅力とは一体何  
であろうか。そうした清明の魅力をとらえていくのに、清  
明伝承の集大成といえる「芦屋道満大内鑑」は最適ではな  
いだろうか。清明伝承は母狐の子別れを取り入れてから、  
そのデフォルメは最大のものとなっていく。そうして受け  
継がれてきた清明像をみていくうちに母狐葛の葉の存在が  
大きくなっていくことに気が付いた。彼の母が狐であるこ  
とは、最初は「簗篋抄」の中のほんの小さな一文にすぎな  
いが「安倍清明物語」より少しずつ性格づけがなされてき

ている。ある時期（たぶん清明が物語りの世界にはいつから）を境に周知の事実であるかのように伝承のなかに取り入れられていくのである。実在の人物であった筈の清明の母が狐ではなくてはならなかったのは何故であろうか。狐が人々に与えるイメージとは。そして、清明像へ及ぼす影響とは何であろうか。これらの疑問点を軸として「芦屋道満大内鑑」の中での母狐とその子清明を考えていきたい。

## 第一章 保名をめぐる女達

ここでは清明の父、保名を取り巻く女達についての考察を試みた。「芦屋道満大内鑑」の特徴として、葛の葉狐の性格づけに大きく影響を及ぼす事になる女性が二人登場することがあげられよう。保名の最初の恋人神の前、妹の葛の葉姫、葛の葉姫に化した狐（葛の葉狐）。彼女たちの性格と位置付けをはっきりさせることで、葛の葉狐のもつ役割を浮き彫りにすることがこの章の目的である。

### 第一節 神の前

神の前の継母の企みにより、金鳥玉兎集は失われ、責めを負って神の前は自殺。情熱的な神の前との恋は保名に強烈な印象をあたえ、この後保名の恋人となる葛の葉姫と葛の葉狐に身代わりの役割を強いることとなる。

### 第二節 葛の葉姫

気丈な神の前に比べ、親元で大切に育てられた葛の葉姫は箱入り娘という印象が強い。神の前を失い、物狂いの身となっていた保名が、彼女を神の前と見間違えることで正気を取り戻す。しかし、情熱的な悲恋のあとでは、葛の葉姫は神の前の身代わりとしか私には思えない。だが、清明の養母となることで子を育てるという幸せを手に入れた彼女は三人の中で一番幸せだったのかもしれない。

### 第三節 葛の葉狐

さてここまでは保名を取り巻く二人の恋人について考えてきた。神の前、葛の葉姫姉妹は人間であったため、保名にありのままの自分を見せることが出来た。しかし葛の葉狐は違う。「葛の葉」という仮の姿であり、しかも異類であることのタブーにまでも苦しまねばならないのである。狐でありながら、保名との間に子まで成し、六年とはいえず人と生活を同じくして人の喜びを知ることが出来たのがこの葛の葉狐である。人との暮しは正体がばれることに毎日怯えながらも、幸せに満ちた毎日だったことは、保名住家の段の坊稚（あべの童子）とのやりとりからも分かることだろう。

葛の葉狐の母としての役割については第二章 第二節

清明の母としての狐で述べようと思うので、ここでは保名に恋する女としての葛の葉狐に焦点を当ててみたい。

まず最初に、保名に関わるることによって得た幸せについて考えてみたい。葛の葉狐の登場は吒枳尼法を道満が示唆する場面より暗示されていくが、実際に保名と出会うのは葛の葉狐の登場の少し後になる。吒枳尼法の為に猟られようとしていた狐というのが、後の葛の葉狐である。年ふる白狐であったため、悪右衛門に追われるが、ここで保名にその命を救われる。畜生にすぎなかった狐が人間の情を知る大事な一場面である。後に正体がばれ保名と別れねばならなくなったとき、葛の葉狐は「あまつさへ我故に数ヶ所の疵を受け給ひ。生害せんと給ひし命の恩を報せんと(略)」葛の葉狐に姿を変えて保名の疵を介抱したと告白している。狐の心に恋心を垣間見ることの出来る場面ではなからうか。彼女は決して保名に惹かれたために人間の姿をとったとは言っていない。自分のために疵を受けた保名を介抱するためだとしている。実際保名が白狐を助けるときに「恩を知り怨を報り畜類」だから助けてやろうという。白狐としては恩に報いたところだろうが一体いつから保名に惹かれたのだろう。本文中からは疵の介抱をしているうちに、という状況が読み取れる。柿の前のように一瞬にしても燃え上

がる恋ではなく、又葛の葉狐のように一目みて心惹かれる恋でもない。きつと長い療養期間の間にゆっくりと育った恋ではなかったろうか。ただ、葛の葉狐と姿を転じた狐が自害しようとした保名にかけた言葉のなかに葛の葉狐の胸中が漏れたように思われる箇所がある。

「はて親達はどふならふ共おまえに心ひかされて。し  
のぎの中力をきた者を。見捨てて置テしなふとは聞コ  
へませぬ。」

葛の葉狐は前の節でも述べたように、決して行動力のあ  
る女性ではない。おっとりとしたお嬢さんなのである。そ  
うした性格の女性が両親を見捨てて保名のもとに走る筈は  
なく、保名自身もこの狐の台詞の前に庄司夫婦について尋  
ねている。しかし、おかしいと感じたとしても、自分の為  
に全てをなげうってきた人が愛しくない訳がない。ここか  
ら保名と葛の葉狐の恋愛は始まったのではなからうか。葛  
の葉狐にしても、異類婚姻というタブーを侵しての恋であ  
る。年ふる白狐であるため、その眷属も多からうし、畜生  
には畜生なりの掟があるはずである。「芦屋道満大内鑑」  
の中でも五万五千という眷属の存在を示唆している。人  
に化けることの出来る狐の存在は稀であろうし、その中でも

白狐となればなおさらである。保名と葛の葉狐の六年に及ぶ生活は、それぞれの柵より解き放たれた小さいながらも幸せに満ちたものだったことだろう。中でも、他の二人にみられない特性として保名の子を宿すという点が上がられる。所謂生母足り得ることの幸せである。葛の葉狐は、それでもあべの童子を育てるといふ養母の役割があったが、柵の前にはそれすらない。ただ、三人の中で子を授かるという点では一番恵まれているにもかかわらず、葛の葉狐は次のように語っている。

「此母が野干の身でさら／＼夫の色香に迷す。御恩をおくるため計。年月をかさねしに去りがたき因果のたねを身にやどし。古巢へも戻られず。我ガ子につながら暮らす内思はず此身のざんげをば。いわねばならぬ義理と成ル。(略)」

こうしてみていくとやはり葛の葉は色香、所謂自身の恋心の為に保名をだましたのではなく、ただ単に恩に報いたかったがついに子まで成してしまったということらしい。今まで子を成したことは客観的にみて、また、他の二人と比較してみても葛の葉狐にとつての最大の幸福だったのだと思ってきた。だが、どうも少し違うらしい。この点を保

名に恋する女性としてみた場合どう考えられるか「芦屋道満大内鑑」の文章をもとに考えていきたい。

保名に恋することによって人の情というものを知ることが出来た葛の葉狐は幸せであつたと思う。これはもう、くどくどと説明するよりも好きな男性と共に暮らすことが出来たことから明白である。では、共に暮らすことによって、幸せを得ることによって苦しんだ事柄というものはなかったろうか。それを保名と関わるることによって得た不幸せとして考えていきたい。

「芦屋道満大内鑑」をみていくうちに気が付いたことだが、葛の葉狐は二つの負い目を感じつつ保名と共に暮らしている。一つは何度も出たように畜生であること。この事は葛の葉狐自身が認めており、常に台詞のはしばしにはのみえる。もう一つは葛の葉狐に対する負い目である。本来はこの妻の座に居たのは葛の葉狐の筈であつた。夫も葛の葉狐と信じ切っている。自分を葛の葉狐の影だと知っているための苦痛である。愛する人に自分の本来の姿を知られてはならない苦しみ、そして秘密をもつことへの後ろめたさと孤独。ここには最早年ふる白狐の姿はなく、ひとりの孤独な女性を見出すことが出来る。それだけに正体がばれたときの葛の葉狐の悲しみは深かつたろう。保名をだましていたことへの罪悪感と、葛の葉狐への申し訳なさと。

そこからさっきの子まで成してしまつたというニュアンスへと結びつくのである。

狐でありながら人の幸せを知つた狐は人の悲哀をも知つてしまつたのであろう。誰も悪人が居ない善側であるがゆえの苦しみであり、「恩を知り怨を報う畜類」であつたための悲劇であつた。

葛の葉狐、つまり安倍晴明の母の登場は最古のものとして「簗簗抄」の由来譚である清明由来之篇が挙げられる。

この「簗簗抄」の成立は諸説有るが、近世初頭には成立していたらしい。序にも挙げたが、井本氏と神田氏の両説によると最古のものは応永正頃（1394）1520）寫本とされている。<sup>註5</sup>また、刊本としては寛永四年古活字版が挙げられる。<sup>註6</sup>ともかくここでは母は「化來の者」としか挙げられておらず性格づけはおろか名前すらない。「簗簗抄」が曆書<sup>註7</sup>であり、由来譚が清明の名に肖つたものだとすればその母の存在もたいして問題ではなからう。「安倍晴明物語」<sup>註8</sup>に至つて父に保名、子に安倍の童子の名が与えられるがここでもまだ葛の葉の名はでてこない。この中で葛の葉は子に試練と宝を与える存在であるだけである。神獸としての色が強く、蘭菊に見惚れ正体がばれるやいなやあつという間に歌を残し子を捨て去っていくのである。ここでは残された父と子の悲哀のほうを描かれている。そし

ていちばん「芦屋道満大内鑑」に近いと思われる「しのだづま」の成立に至る。「しのだづま」の最古のものは版元鶴屋喜右衛門の延宝二年版行のものがある。<sup>註9</sup>しかしこれは題簽もなく、延宝六年二月版行の山本角太夫正本のものが正しいかもしれない。<sup>註10</sup>ここではじめて清明の母は葛の葉という名を与えられ、人への距離を少しづつ狭めていくのである。ここから葛の葉狐は神から人へと降下し後の葛の葉別れの原型が出来たのである。「芦屋道満大内鑑」に至つては葛の葉狐はすっかり人としての価値観倫理観を持ち、狐であることを常に恥じている。保名への恋よりも報恩のほうを強調していることもその現れといえよう。

「夫の大きき大いせつさぐちなるちくしやうざんがいはい。人間よりも百クばいぞや。」これは「芦屋道満大内鑑」の中での葛の葉狐の台詞であるが、ここでは己れの異類性を自ずから暴露せざるをえなかつた葛の葉の苦悩と狐という身を恥じている様子が読み取れるのではなからうか。下級陰陽師<sup>註11</sup>に読み継がれたらしい此等の話が次第に彼らの立場を葛の葉狐へ投影し始めてきた現れであるとするのは性急であろうか。草別れの段にても、保名が安倍野への同道を促したときに、葛の葉狐は眷属のおきてと畜生界の存在を強調している。

「(略) 色におほれ我ガ子に迷ひ。此身をしられた其上工に。二タたび人ン間ンに交る時は。五万五千の眷属にうとまれ剩あまざさ。尽未来際畜生界を出てやらぬ。(略)」

これをもて分かるように、我が身の正体を恥じると共に狐眷属というひとつの社会の掟ともいべきものを示唆している。これに対し次の一文をみてもらいたい。

「(略) 仰はうれしく侍共みづからが身の上は。一度住家へ帰りては又おなじ家へ立帰り。住といふことかなはぬぞや。(略)」

これは「芦屋道満大内鑑」の先行作品とされている紀海音の「信田森女占」の同様のシーンの一文である。第四やかんのみち行と題される場所であるが狐社会の存在というものは「芦屋道満大内鑑」ほど前面にでてはいない。ここでは一人女房ということもあり狐の社会というよりはこの狐自身の倫理観というものに保名の元に残るかどうかという選択権は委ねられている。二人女房むすめの場合も一人の本物が現われたための破綻という周囲の状況、二人が引き裂かれねばならないという本人の力ではどうしようもない運命というものが強調されたためであろうか、狐本人の

意志で保名と別れるというよりは周囲より引き裂かれている。ただ「信田森女占」でも狐は自身の異類性を述べていることは見落としてはならないであろう。

「もとより其身はちくしやうの。くるしみふかき身のうへに。なをうきことのかさなりて。思ひのたねと。なりやせん(略)」

「芦屋道満大内鑑」「信田森女占」共に、一人女房二人女房の差はあるが、共に主人公である狐が自身を畜生と認めているところに先行作品との差があると思つてよからう。しかし、「信田森女占」の方が先に成立しているからであるろうか、狐に対する見解は「芦屋道満大内鑑」の方と少々違う。次にその違いが判る文を参考までに載せてみたいと思ふ。

「芦屋道満大内鑑」 第二小袖物狂ひ 保名の言葉より  
殊に白狐は妖物にて唐土にては阿紫となづけ。我が朝にては専御前。宇賀の御魂の神使にて恩を知り怨を報畜類。

「信田森女占」 第四 くずのはと三谷源五の会話  
狐と申はおそろしい物。(略) 皆神にておわします。

真言にてはだぎに天。弁才天のつかはしめ。いなり山におゐては貴狐明神といわれ。めうぶ御前とあがむとかや。やくそくかたき石となるたぐひも多き咄有。執じやく執心のふかい事人間に相かはらず。親が子をあはれめば子は又親をしたひ。心のやさしい狐をつろうとは。是計はいらぬ物。

「芦屋道満大内鑑」の方は悪右衛門の狐狩りより逃れてきた白狐をみて保名がいう台詞である。又、「信田森女占」の方は道満の命を帯びた源五が狐釣りの罫にて野の狐を狩るといのでそれを諫めるくずのはの台詞である。面白いのは「芦屋道満大内鑑」の方は狐を恩に報う畜類としているのに対し「信田森女占」の方は皆神であるとしている点である。明らかに狐に対する人間側の見解が違っている。狐自身の口から狐の神性と人間と劣らぬ心ばえを主張している点も、神の使いとしての狐の象徴としてとらえられはしないだろうか。もう一つ、狐の正体がばれるところも面白い違いがある。

#### 「信田森女占」 第四

くずのはにはひに心ひかされおも色かはり尾を出し。寛すついでまはりしは浅ましかりし有様也。

これは畏の油あげをわざとくずのはの前にちらつかせた源五の作戦にまんまとひっかかったり正体を見せてしまうシーンである。「芦屋道満大内鑑」ではもう一人の葛の葉である姫の登場で正体がばれるのだが、ここではまだ「しのだづま」の流れが残っているらしく、狐の獣性の暴露という印象が強い。因みに「しのだづま」では蘭菊に見惚れているうちに母の顔が変わる、もしくは尻尾を見せるのの子が発見し恐がって泣いてしまうというものである。「しのだづま」も獣性の暴露といってもよいであろう。この狐の本性を表すシーンは「芦屋道満大内鑑」では消えたかに見えるが、実は葛の葉狐の保名に対する告白の中に残っている。

「芦屋道満大内鑑」 第四 保名住家の段 葛の葉狐の告白  
はずかしやあさましや年ノ月ソつゝみしかひもなく。  
おのれと本性をあらはして妻子の縁を是切りに。わかれねばならぬ品になる。

これは内山氏の指摘であるが、成程「おのれ」以下の表現はこの場合当てはまらない。何故から葛の葉狐は自分から獣性を暴露したのではなく、葛の葉姫の出現によって狐であることを告白せざるをえなかったからである。



こうした流れを追っていくうちに、やはり葛の葉狐の神位からの降下、人間化といったものが明らかになってきた。人間に恋し人間になりたかった狐。そこには、恩に報いるという言い訳なくしては恋する人の側にいることの出来なかつた悲しい一人の女性がいる。そうしたさまざまな制約に翻弄される女性像は社会の底辺に位置せざるをえなかつた人々の心のささえともなつたとは考えられはしないだろうか。

## 第二章 狐について

葛の葉狐に論が及びにあたり、一般に言われている狐像と葛の葉狐の相違点を探ることにした。

### 第一節 伝承のなかの善狐悪狐

狐はさまざまな文献にあらわれており、その最古のものは「日本書紀」に記載されているといわれている。しかしそれらは日本独自のものではなく既に中国の影響下にあつたとされている。そこでここでは江戸の天明年間にはたしかに舶載したとされている「聊齋志異」の中に登場する狐の特徴を独自に分析し、葛の葉狐との比較を試みた。

### 第二節 清明の母としての狐

中国における狐は善狐悪狐に大きく分類できる。特に葛の葉狐が当てはまるであろう善狐はどちらかというところ的存在に近い。しかし葛の葉狐は中国の善狐とも違い、人間との相違が少なく、より人間的である。自らを「ぐちなるちくしやうざんがい」と認め、保名のもとにきたのも「命の恩を報ぜん」と葛の葉姫に姿をかえたとしている。清明伝承を追っていくと、この作品の前作「安倍清明物語」においては母葛の葉狐の子別れの悲哀よりも、残された父子の悲哀が前面に押し出されており、葛の葉狐はむしろ中国における善狐に近い。今まで唐突に父子の元に去っていた葛の葉狐は、「芦屋道満大内鑑」に至って実に無理なく父子の元を去っている。張りめぐらされた伏線がそれらを可能にしている。ここではその伏線を明らかにしてみた。

### 第三章 母と子へ清明からみた葛の葉

葛の葉狐についてここまで考えてきたわけだが、ここではその子清明に焦点を当て、清明からみた母親像を探っていくかと思う。その前に、この「芦屋道満大内鑑」に行き着くまでの清明像の流れを追っていくことにしたい。その上で「芦屋道満大内鑑」の中での母と子の姿を追ってみたい。

「芦屋道満大内鑑」の中での清明の出番は少ないといつて良いだろう。この物語の中で元来の「しのだ妻」物と大きく違うのは題名にもある道満が善玉として描かれていることである。清明自身の活躍よりその出生の不思議に焦点があてられたのも、清明の父保名が巻き込まれた陰謀と陰謀に加担せざるをえなかった道満の苦悩を前面に打ち出すためであったと思われる。そうした中で清明は生みの母と別れねばならなかった「あべの童子」として描かれ観客の涙を誘う存在という位置につくのである。この話の中で清明の出番は少ないが、強いてその活躍を上げるならば第五段以降、とくに「清明蘇生の祈」の場面ではなからうか。

逆にこれだけ清明の出番が少ないのは、これまでの類書（しのだ妻系列の一連の書）により、清明の活躍は人々の間に浸透していたからだ、と考えるのは早急であろうか。ここにそれら一連の書を記してみたいと思う。一連の書を見比べているうちに、清明像が少しでも浮き上がってくれば良いのだが。一連の書を挙げるにあたり、先行の順序が二種ある。一方は渡辺守邦氏の説である。こちらは「簗篋抄」↓「安倍清明物語」↓「しのだづま」↓「芦屋道満大内鑑」とされているが、加賀佳子氏は「安倍清明物語」と「しのだづま」の両作共通の祖となる語り物の存在を推定する説を打ち出されている。説教節の説もたいへん心惹か

れるが、ここでは各書を渡辺氏の説の順で並べ比較するに留めたい。

#### 「簗篋抄」(三國相伝簗篋内伝金烏玉兎集之由来)

名は童子(仲丸の子孫)改め清明。伯道上人より書を伝授。蛇を助け竜宮へ。四寸之石匣と鳥葉(聴耳)を耳に施さる。母は化來の者で人間ではなく狐の變化(童子が成人して和泉国信田の杜で年経る狐の母と再会)。遊女として諸国を流浪。父は猫島の或る人。

#### 「安倍清明物語」

名は安倍の童子改め清明。蛇を助け竜王より四方四寸の金の箱を賜り一青丸を耳、口に施さる。自然知を得る。吉備の伝えた簗篋内伝を勉強。母は狐。父は安倍の保名(人皇二十六代村上天皇御宇の信田の杜近き阿倍野の住人)。

#### 「しのだづま」

安倍の童子改めはるあきら。母葛の葉(狐)より四寸四方のこがねの箱(龍王の秘符)と聴耳の玉を与えられる。童子は仲丸の再誕。金烏玉兎集を母(文殊)より授かる。父は安倍保名。母が去った時童子七歳。

「芦屋道満大内鑑」

名は安倍の童子改め清明（但し道満より名付けられる）生母葛の葉は狐。養母に葛の葉姫がある。自然知を生母より、金烏玉兎集を道満より授かる。父は安倍保名。母が去った時童子五歳。

以上が大変大雑把であるが清明伝承を根底に流れとしてもつ書の大まかな流れである。「芦屋道満大内鑑」では消えてしまった説話として、龍王より授かる卍と玉がある。これは何故消えてしまったのだろうか。又術くらべも辛うじて蘇生の術が残っているのみである。更に童子が八才である為、入唐の話も消えてしまっている。今まであった伝承が消えることによって、話の焦点がある一点に絞られているようである。それが葛の葉狐の説話の挿入である。「芦屋道満大内鑑」では従来のだ妻物と違い、道満の苦悩を前面に打ち出すといった試みがなされているため、話の筋はオムニバス形式に近く、保名と葛の葉狐の話が一つ、そして左大将の陰謀と己れの正義感との間に板挟みになって苦悩する道満の話がもう一つ同時進行で進んでいく。ここでは道満の話を深く掘り下げることは避けたいが、従来ののだ妻物、そして清明伝承が竹田出雲の手によってこなされる事により、より矛盾点が少なくなっていること

は重要なキーポイントになるのではないだろうか。

「せいめい」の名を清明（ハレアキラ）と清明（キョアキラ）に区別できるということは既に述べた。要するに実在の清明と伝承の清明の区別である。伝承の清明の名の誕生も常州猫島生まれの童子が天皇恩愍平癒の褒賞に二十四節第五の清明節にちなんで付けられたという実に曆書らしい理由であると渡辺氏は語っている。実在の清明には入唐の事実は一切無くこの点から既に「簗篋抄」由来譚の内容と大きく違っている。「簗篋抄」自体清明撰とされているが、これもさまざまな実証例により疑わしいことがわかっている。入唐伝という説も同様である。狐を母にもつ伝承の清明が物語りの中で息吹を与えられたのは一体いつのことであろうか。もともとこれらの原典ともなった「簗篋抄」は清明の没後、陰陽を司職にした安倍家三流陰陽道のうち牛頭天王信仰と集合した一派が清明の名を冠することにより權威付けをしようとしたのではないかと思われ、その作者は清明の子孫晴朝だとされる説がある。特に此等の曆書が安家の一子相伝であったことも清明への伝承化へ拍車をかける一因となったのかもしれない。このように、いわば秘密のベールに包まれていた曆書が何かの弾みで世に流布されたのは室町時代のはじめとされる。此等のことにより、人々が清明に対して抱いていたイメージというものが膨ら

む一方であったのは容易に想像できる。そこへ母は狐であるという一文が「簗篋抄」由来譚に記載されていればその物語化が如何に嬉々となされたかはその後の類書の数の多さからも分かるであろう。伝承の清明はそうしたことから「簗篋抄」が世にでる以前からその息吹を与えられていたといつても過言ではない。人々の想像の中で膨らんでいった清明像を裏証することはまず不可能であろう。しかし、その類書の多さが自ずから人々の関心の高さを証明しているのではなからうか。

ここまで、曆書と清明の関わりについて述べてみた。次に、ただの童子であった安倍の童子がその名を与えられるのは何時か、そしてそのことが示す事実というものをみていきたい。寛文二年刊浅井了意作「安倍清明物語」<sup>註</sup>によって清明は伝承の世界に入ったとされている。童子の名が安倍の童子に変わったのもこのころである。又、父の名も猫島の或る人より安倍の保名という固有名詞が与えられている。ここでは二人に名が与えられたのと呼応するかのよう  
に父と子の、妻もしくは母と別れた悲哀というものが描かれている。ここで安倍の童子は母が狐であることを暴く存在であり、異類をいち早く見破る存在でもある。母の名はここではまだなく、その分父と子の悲哀に力が入っている様である。母の名葛の葉の登場は元禄十二年秋京都早雲長

太夫芝居上演歌舞伎「しのだづま」においてとある。<sup>註</sup>「安倍清明物語」では母が神獸として描かれる以上、父と子の悲哀に重点を置かざるをえなかったのだらうという予測もたてられようが、それよりも父と子の悲哀が描かれるようになったのだということに着目したい。それまで曆書の由来譚にすぎなかった安倍清明の物語が、血肉の通った物語として生まれ変わったのである。ここで人々の心の中にあつた安倍清明という希代の陰陽師は母に去られた悲劇の幼子として生まれ変わったのである。さらに「しのだづま」では童子に七歳という年令をあたえ、母が去らねばならなかった理由への追求を暗に示している。ここで母は一介の野干と神位から降下しているが、葛の葉姫の存在がないため安倍の童子は母の消失の原因を自ら探らねばならない。「芦屋道満大内鑑」ではこの点葛の葉姫の登場と共に葛の葉狐が去らねばならない理由は童子にも観衆にも明白に分かるように設定してある。母を求めて泣く安倍の童子の哀れさと母と認めてもらえぬ葛の葉姫の哀れさが子別れの場面により一層趣を添えている。

ところで、ここまで何の疑問もなく使ってきた言葉に「あべのどうじ」がある。私は単に子供であるから童子とされ、安倍保名の息子であるから安倍と使うのだと思つてきた。しかし「安倍野童子」とする時その意味は違つてく

るようである。折口氏の説註がそれである。寺役に使われる場合村人を童子といい、安倍野の原中に村を構えた寺奴の一群があり近所の大寺に属していたのではないかというのである。他の村にもある動物祖先の伝説がこの村にもあり、村人を狐の祖先としていたのではなからうかと。このことは今はもう正本の消失で証明が難しくなっている説教節との関わりに結び付けられるのではなからうか。土御門家の繁栄と共に下級陰陽師が安倍氏の名の恩恵に肖ろうとしていたらしいことは盛田氏の見解でも明らかである。こうした事実が浮かび上がると共に此等の物語は違う様相をして私の目の前に現われる。子別れという悲劇の中にもしかしたら社会的に身分の低かった者達の悲哀も込められていたのではなからうか。語り歩きという説教節の存在が明らかになったときその確実性は増すのではなからうか。もともと異類との結びつきのもたらした悲劇の物語りである。安倍の童子は母と別れ、狐の子というハンデをもつ。そのハンデを補うが如くに様々な宝を与えられる。宝とはそういういた社会的身分の低かった者達の心のささえとも成り得たのだからか。

## 結 び

これまで「芦屋道満大内鑑」の中での葛の葉像を様々な

角度から探ってきた。その起源と流れを追う事で如何にして「芦屋道満大内鑑」の葛の葉に至ったか、又「芦屋道満大内鑑」の葛の葉が意味するものが何だったかということがおぼろげながらわかってきた。ここでは結びとしの葛の葉の意味するものをまとめてみようと思う。

「芦屋道満大内鑑」はそれまでの有名な作品の影響を様々な場面に取り入れた実に時代のニーズにあったともいうべき作品であった。清明伝承の集大成であることはもう言うまでもないが、紀海音、近松門左衛門註といった大衆に人気のあった作者の影響が大きい事は忘れてはならない事実である。う。「芦屋道満大内鑑」という題名は「朝廷に仕える臣下の鏡、芦屋道満」という意味だという。では当時時代の最先端をいく物語りにこんな題名を付ける世の中とは一体どんな時代だったのであろうか。

「芦屋道満大内鑑」の初演は享保十九年（一七三四年）であるという。享保註の世とは一体どういうものだったのであろうか。歴史書によると享保という年号は二〇年までしかない。中御門天皇、將軍吉宗のときである。享保十六年の米価の下落に伴い、世はいささか騒がしくなっていたようである。江戸大火が頻発し、庶民の飢えが深刻になりついに幕府が乗り出している。お家騒動も多く、なかなか落ち着かぬ世の中であつたらしい。そういう中でそのまま

での悪役が善玉として再登場する物語りは、観ているものにとつても心惹かれるものだったのではなからうか。簡単に事実のみ記してある歴史書には庶民の実情までは記載されていない。しかし、その生活というものは士農工商をあげるまでもなく貧富差、身分差が激しかったのではなからうか。特に社会の底辺部分に生きる人々にとつて不満を洩らすことすら許されない生きにくい社会だったことだろう。前置きが長くなってしまったが、「芦屋道満大内鑑」が世の人々に支持された理由はそんな処にあるのではないか、というのがこれまで論をすすめてきた中でわかったことである。底辺部分にある人々についての記述を折口氏の論文で見付けたときは少し疑問であったが、こうして深く葛の葉について考えていけばいくほど共感できる部分が多くなってきた。まず、「芦屋道満大内鑑」の中での葛の葉狐は恩に報いる、という大前提というべき性格付けがなされている。世の中が次第に乱れつつあった時代において、恩義というものは忘れ去られようとしていたのではなからうか。恩に報いるという前提の方が保名との恋よりも前面にでていたのはそのせいであろう。今迄の先行作品の中では葛の葉は一人女房であった例が多く、その性格も人間的というよりは神に近く（もしくは神そのもの）人間より高位にいた観があるが「芦屋道満大内鑑」における葛の葉狐は自分

の立場を恥じている。しかしながら、はずべき立場である葛の葉狐の身にも彼女の属する社会は有り、その掟によつて支配されている。この葛の葉狐の属する世界は物語りを越え、その当時の人間の社会にも相通じるのではなからうか。要するに葛の葉狐の恋は身分違いの恋なのである。身分が違うために恩に報いるとし、保名の側にいる口実を作ったのである。恩に報いるためにいたと告白する葛の葉狐は何より、自分自身がその口実を信じたかたのではないか。下級陰陽師等の心の拠り所であった清明伝承は彼らの多く住んでいた地域に広がった。<sup>註26</sup>それは下級陰陽師等が自分たちの祖を安倍晴明であるとするので彼らのプライドを保つことが出来たからである。元来別物であったはずの異類婚姻譚を融合したのは、彼らの祖が狐であったという地域独特の言い伝えとの混入も考えられるが、異類婚姻譚<sup>註27</sup>もたらず悲劇が自分たちの姿と重なったためだと考えられる。そのように考えていくと、葛の葉の性格の変容は時代の変容であり、形を変えていった伝承と説話はその物語りを語る人々が共鳴する部分のみを残して消失もしくは増補されていったのであろう。「芦屋道満大内鑑」における葛の葉狐はその性格を人間に近くすることでより観客に近い存在となり人々に支持されたのではなからうか。この物語りの根底に流れるものは身分の差という江戸時代には決し

て珍しくない問題である。そしてそれを投影する人物に狐という異類を取り上げることによって目立たぬ主張を続けられたのであろう。保名の他の恋人、神の前と葛の葉姫が身分ある人間の娘達であった理由もここにある。異類婚姻譚の悲劇は実はこの物語りの発祥ともいえる語り手たちの姿を託した彼ら自身の悲劇だったのである。

葛の葉狐は人間へ降下しようともその本質である獣性は払拭することが出来ない。「芦屋道満大内鑑」の中の葛の葉狐の悲痛な叫びが漸く届いた気がする。

「常々父ごぜの虫けらの命を取ル。ろくな者には成ルまいとたゞかりそめのおしかりも。母が狐の本性を受け継いだるかあさましやと。胸に針はりさすとく。なんぼうかなしかりつるに(略)」

自分の異類性を見せ付けられた悲しみとその子まで異類性を引き継いでいる苦悩。母、葛の葉狐の苦悩は異類婚姻譚の宿命であり身分社会の投影でもあったのである。こうして安倍の童子はハンデを背負いながら生きて行くのであるが母の心配をよそに狐より引き継いだ自然知を元に安倍清明として立派に出世の道を歩むことは観客も知っての通りである。ひとつの曆書が物語りを生み時代がそれを育ん

でいく。母の去った訳を知らねばならないのは実は私達だったのかもしれない。

## 註

1 渡辺守邦氏「清明伝承の展開

—『安倍清明物語』を軸として—」

(国語と国文学 昭和五一年一月) 一〇四頁

2 渡辺守邦氏「清明伝承の成立

—『薫薫抄』の「由来」の章を中心に—」

(国語と国文学 昭和五九年二月) 二三頁

3 吒尼天もしくは茶枳尼天とも。わが国の陰陽道で聖天、弁才天と共に三玉女とされる。古代インドの鬼神であり自在な通力で六ヵ月前に人の死を知りその心臓を取って食うという。日本では白狐に跨がった美女の像で幸福を祈るとして稻荷社に祭られ、狐信仰と結びついている。外法であり現世利益を願う。平家物語、太平記にもその法の名が現われる。

4 「義経千本桜」にても同様の設定がみられる。ここでの狐に対する定義は「芦屋道満大内鑑」とまったく同じといつてよいだろう。

5 井本進氏「薫薫内伝金鳥玉兔集成立の研究」

(科学史研究一三 昭和二五年一月)

神田茂氏「簾簾及びその類書について」

(科学史研究二三) 二二頁

6 註5に同じ

7 神田氏「簾簾抄及びその類書について」

(科学史研究二三) 二二頁

古活字本については寛永二、三、四、五、六年本の存在が

記してあるが、ここでははっきりしている中でいちばん古いものを挙げた。もっと古いもので慶長一七年(1612)

古活字本もある。

8 資料1参照

9 守隋憲治氏「しのだづま考

—狂言本と六段本と—」

(国語と国文学第八卷 昭和六年四月) 六九七頁

10 盛田嘉徳氏「しのだづま」について」

(大阪学芸大学紀要A人文科学第三号 昭和三〇年三月)

二四六頁

11 註10に同じ 二四九頁〜二五五頁

12 異類婚姻譚のひとつ。狐が女に化けて人間の男と結婚する

話。

女房が狐のみ(一人女房型) 青森から鹿児島まで約九〇話

報告

別の人間の女房がいる(二人女房) 中国地方と九州南部を

除く各地で約二五話報告話

いずれもしのだ妻の影響をよく受けている。

(日本昔話事典狐女房の頃より 弘文堂)

13 『竹田出雲・並木宗輔 浄瑠璃集 新日本古典文学体系』

(岩波書店) 九六頁 内山美樹子氏の注釈による

14 註1、2、13に同じ。

15 註13に同じ。五四五頁。なお、加賀佳子氏の修士論文をお

借りしたところ、後述する「あべのどうじ」の名の由来、

語り物の存在とそれを語った人々との関わりなど共鳴する

部分が多数あり大変参考になった。

16 註2に同じ。

17 井本進氏「簾簾内伝金烏玉兔集の成立の研究」

(科学史研究一三 昭和二五年一月) 四一頁

18 村山修一氏『日本陰陽道総説』

(塙書房) 三二三頁

19 註1に同じ。一〇二頁

註17の村山氏の説では清明の作であると立証されている。

20 註17に同じ。四四頁

21 註2に同じ。室町時代の「簾簾抄」の民間への流布の影響

と思われる。

22 渡辺守邦氏「狐の子別れ」文芸の系譜

(国文学研究資料館紀要一五卷) 一四九頁



23 折口信夫氏 信太妻の話

(折口信夫全集第二巻 中央公論社) 三〇〇頁

24 近松門左衛門作「百合若大臣野守鏡」と「芦屋道満大内鑑」

との関係の深さはよく挙げられる。特に川本氏は詳細な類似点をあげている。

25 註13に同じ。二頁

26 註10に同じ。

## 資料

### 1 「安倍晴明物語」解説

全七巻。前半三巻に「金鳥玉兔集」の三国伝来と晴明の道満を倒し見事天文博士になるまでが描かれる。ほとんど「簾篋抄」と内容は同じだが母が和泉州信田大明神化現の狐とするところが違う。父の名、母の名が与えられる。

## 参考文献

加賀佳子氏

「古浄瑠璃のだづま成立考―二人のあべの童子―」

『早稲田大学大学院文学研究科平成二年度修士論文』

『同上 (資料篇)』

「古浄瑠璃のだづまの成立―なか丸とあべの童子―」

『芸能史研究第一一五号別刷』

村山修一氏「日本陰陽道史総説」『塙書房』(昭和五六)

渡辺守邦氏「清明伝承の展開―安倍晴明物語を軸として―」

『国語と国文学』(昭和五六年一月)

「清明伝承の成立―簾篋抄の由来の章を中心に―」

『国語と国文学』(昭和五九年二月)

「簾篋抄以前―狐の子安倍の童子の物語―」

『国文学研究資料館紀要第一四号』(昭和六三年三月)

「狐の子別れ文芸の系譜」

『国文学研究資料館紀要第一五号』(平成元年三月)

守隋憲治氏「しのだづま考」

『国語と国文学』(昭和六年四月)

盛田嘉徳氏「しのだづまについて」

『大阪学芸大学紀要A人文科学第三号』(昭和三〇年三月)

井本進氏「簾篋内伝金鳥玉兔集成立の研究」

『科学史研究一三』（昭和二五年一月）

神田茂氏「薫薫抄及びその類書について」

『科学史研究二三』（昭和二七年八月）

折口信夫氏「信太妻の話」

『折口信夫全集第二卷・中央公論社』

江口孝夫氏「狐・九尾の狐の受容と展開」

『国語展望五三』

川本浩子氏「芦屋道満大内鑑成立」

『お茶の水女子大学国語国文学会国文学第二二号』

（昭和三九年七月）

黒木勘蔵氏「葛の葉戯曲の系統的研究」

『近世演劇考説』（昭和四年一月）

国立劇場芸能調査室編

「上演資料集・127」（昭和五一年五月）

「上演資料集・302」（平成二年七月）

最後にこの論文を書くにあたり、加賀佳子氏から修士論文を貸与させていただいた。長期にわたる貸出しを快く承諾してくださった氏に心より感謝申し上げる次第である。